

なからぎ

202号

2013年7月

女性ネットワークの構築をめざして

副学長・地域連携センター長 東 あかね

さる6月1日より3日間、第5回アフリカ開発会議（The Tokyo International Conference on African Development (TICAD)）が横浜で開催され、アフリカの治安対策のために5年間で1,000億円の支援をすることなどが報じられた。日本人全体が、アフリカの人たちと共に、新しい世界を築き上げる時代になったといえよう。この大学には、アフリカと関わりの深い教員が数名おられるが、私自身は、アフリカの地を踏んだ経験がない。

2011年夏、スコットランドで開催された国際疫学会に学生や友人と共に参加した。疫学、すなわち、社会全体の健康増進をめざした研究者の学会で、全体会議と地域別会議が開かれた。私たちは、西太平洋地域会議がキャンセルになって行き場を失い、アフリカ地域会議に参加した。

アフリカの多くの国、特にサハラ以南は平均寿命が50歳以下であり、エイズ、結核等の感染症、紛争による障害やレイプ被害等のテーマ発表があった。私たちは異質な存在として映ったのであろう、“Are you African?”と質問され、“No, I am Japanese”、アフリカに関心があるので参加したと答え、握手した。自分たちが、平均寿命が長く平和な国から来た、世界一幸せな人間集団であることを実感するとともに、肌の色は異なっても、健康課題の解決をめざす者同士であることを感じた瞬間であった。

『祈りよ 力となれ』は、2011年にノーベル平和賞を受賞したリーマ・ボウイーさんの自伝である。1989年、アフリカのリベリアでは内戦が勃発し、平穏だった首都モンロビアの街に銃と死体があふれ、17歳のリーマは、食べ物もお金もなく路頭に迷うこととなった。そして、妊娠、出産を4回繰り返し、リーマの父の言葉によれば、「ただの赤ん坊製造機」となって、闇の中でもがいていた。ところが、戦争被害によるトラウマヒーリングのためのボランティア活動をきっかけに、リーマは立ち上がった。時間をかけて、もの言わぬ女性たちから言葉を抽きだし、女性自身が回復し、被害をなくしていくためには、暴力にノーと言い、平和にイエスと言うことを訴え続けた。この活動は、平和構築（peace building）のための女性ネットワークとなって広がり、社会を変えていった。この本は、リベリアの女性が一心に祈り、行動し、平和への道を開いた記録である。

女性の立場で、女性研究者支援に取り組むようにとの学長の依頼により、副学長に就任して1年が経過した。まずは、女性の研究活動を支援するために、学生、教員、そして卒業生からなる府大版女性ネットワーク「かつら」を立ち上げ、全ての人々が学びやすく、働きやすい大学にしたいと考えている。
(ひがし あかね：生命環境科学研究科教授)

参考図書：『祈りよ 力となれ』リーマ・ボウイーほか著 東方雅美訳 英治出版
Mighty Be Our Powers: How Sisterhood, Prayer, and Sex Changed a Nation at War by Leymah Gbowee with Carol Mithers

御紹介の『祈りよ 力となれ：リーマ・ボウイー自伝』（請求記号 289.3 || G）は、2階閲覧室入口に配架していますので、御利用ください。

時は去りやすく

図書館運営委員 田 淵 敦 士

後期印象派の画家として有名なゴッホは生前、弟テオドルや友人のベルナールに宛てて沢山の書簡を送っている。37年の人生を自らの手で断つまでの、絵画に対する情熱、葛藤あるいは苦悩が記されている。「ゴッホの手紙」(1955、岩波文庫)、この本との出会いは高校時代にある。学年集会の冒頭、主任の先生が挨拶をするのだが、毎回、「ゴッホの手紙」からの一節を紹介してくれる。空調設備のない体育館に集められて聞く主任の話は、高校生の私には退屈で、何が言いたいのか意味が分からないし、早く過ぎ去って欲しい時間であった。どのようは話だったかは覚えていないのだが、ただ、毎回最後に、「握手を送る」というフレーズで終わっていることは記憶の片隅にあった。

人生はどこでどのような出会いがあるか分からないものだ。退屈な学年集会を我慢していた時代から10年ほど経って、博士後期課程に在籍していたときのことである。研究が思うように進まず、投げだしたい、逃げ出したい、そんな気持ちになっていた時期があった。そのとき逃げ出した先が本であった。できるだけ専門とは違う本を選び読みふけていた。ただ目の前の問題から逃げたいだけだったのだと思う。そのとき再会したのが、「ゴッホの手紙」であった。何となく高校時代を思い出し、ノスタルジックな気分を求めて手に取った岩波文庫の3冊。「時は去りやすく愛情はさめやすし、そは束の間よりも短く、夢よりもわずかに長し。ときは我よりわが喜びを奪いさる。」という詩を引用し、ベル

ナールへの手紙を書いている。その詩の前に、「憂鬱の時期が過ぎたら以前よりも強くなって、君は健康を取りもどすよ」とある。ゴッホが言おうとしたこととは少し違うのかもしれないが、それでも10年という時間を経て、ようやく私の心に先生の声が届いたような気がした。完全に吹っ切れたという訳ではないのだが、迷いが消えるきっかけになったように思う。

当時の私の研究テーマは、文化財建造物の耐震性能を評価するとき、伝統的な土壁の力学的な性能をどのように扱うかというものだった。そもそもは都市計画に興味があり、建築学科に入学したのだが、卒業研究のために配属されたのは鉄骨構造講座であった。名前は鉄骨とついているのだが、薬師寺金堂や平城宮跡の朱雀門などの構造設計をしていた部屋だ。工学部にはいたのだが、数学や物理には苦手意識を持っており、理系とは名ばかりの学生だった私が、建築学科の中で最も数学や物理を必要とする研究室に入ってしまった。それまで授業は、ほとんど出席した記憶がなく、大学での勉強と言えば、研究室に入ってから以降のスタートとなる。折しも、阪神淡路大震災の年であった。神戸や大阪を中心として多くの文化財建造物の被害が注目を集めた時だった。文化財建造物、特に国宝や重要文化財などは建築基準法第3条の例外の規定があるため、耐震性能よりも歴史的意匠を優先する風潮が強かった。安全よりも文化を優先する、そんな考えが無かったかといえば嘘になるかもしれない。しかし、震災を

機に、文化財建造物も安全性を求める方向に大きく流れが変わった。そもそも文化財とは何なのか。乱暴な言い方をすれば、長く培ってきたものであり、珍しいものであり、建築で求められる美しさとは少し違うような気がしていた。そんな気持ちを見透かされたように、後輩から、所詮、文化なんてものは、明治以降の概念なのだから、今さら保護したところで何になるのか、というようなことを言われたこともある。内藤湖南の言う「一般世人が文化そのものをどれだけ理解しておるか」(『日本文化史研究』1976、講談社学術文庫)が痛く胸に刺さる。言葉としては近代以降のものであったとしても、概念が近代より前に無かったのかといえ、そうではないだろう。文化とは何か、という本質的なところでは理解が進んではいなかったが、建築の形をした文化を、次の世代にどのようにすれば伝えていけるのか、私の研究のモチベーションの一つであった。

一方で、文化的な価値の背景にある本質を考えるうえで、井上章一の「つくられた桂離宮神話」(1997、講談社学術文庫)は興味深い。簡素でありながら計算しつくされた日本的な美意識を感じることができるとされる桂離宮が、どういう流れでその存在価値を認められていったのかということについて、豊富な資料から読み解いている。ドイツの建築家ブルーノ・タウトによってモダニズムの象徴としての評価を受け、それが次第に丹下健三をはじめとする日本の建築家たちに脱モダニズムの流れとして語られていく流れがあったようだ。それに加わる観光地としての桂離宮が、一般世人がみる文化としての建築の評価として絡んでいく。文化的な価値とは多数派によって決められるものではないが、多数派

の作り出した流れがあり、それに対する少数派の批評という過程を通じて深まっていくのではないだろうか。

耐震性能に関する研究に従事するということは、裏方ではあるものの、文化的な価値の存続を左右するような仕事に遭遇することもある。最近では、その得も言われぬ緊張感が何かしら心地よいものとして感じられるようになった。建築の設計は理想と現実の乖離を埋める作業の連続である。理想を追い求めながら、現実的な落としどころを探る。法的な制約があり、予算的な制約があり、時間的な制約があり、それらを介して思惑が錯綜する。きわめて世俗的だと思う側面もある。学生時代に、研究室の仕事を通じて、そうした体験ができたことで、机上の空論だけではない現実的な落としどころを考えるというものの見方をするようになったのかもしれない。理想と現実、どちらに重きを置くかは状況次第だが、学問の本質は、知的好奇心を満足させること(朝永振一郎著「科学者の自由な楽園」2000、岩波文庫)であるとするならば、少なくとも大学での研究は理想とは何かということについて考えていきたいと思っている。

振り返ってみると、やはり時は去りやすく、時間は無駄には過ごしたくない。しかし、無駄と思えたことも、後になって考えてみると、決して無駄ではなかったということもある。こうした経験があったからこそ、私は少しは強くなったのだろうし、健康を取り戻せたのだと思う。最後に、ゴッホに倣って強く握手を送りたい。

(たぶち あつし

: 生命環境科学研究科准教授)

ご紹介の『ゴッホの手紙』(請求記号 723.359 || G || 1~3)、『日本文化史研究』(請求記号 210.12 || N || 1~2)、『つくられた桂離宮神話』(請求記号 521.825 || I)、『科学者の自由な楽園』(請求記号 420.4 || T)は、2階閲覧室入口に配架していますので御利用ください。

2012年度の利用者サービスをふりかえって

貸出総数は過去最高を記録

(23,374冊)

残念ながら学生貸出冊数は減少

貸出総数は過去最高の昨年度 (23,313冊) を上回りましたが、学生 (学部生 + 院生) の貸出冊数は若干下回りました。(21,578冊 ⇒ 21,363冊)

他大学図書館への訪問閲覧も増加傾向

まだまだ必要な資料がない?

他大学から府大図書館へ来館される方は21年度をピークに減り続けています。(21年度 136件 ⇒ 24年度 80件)

他大学図書館への訪問利用も減少していましたが、23・24年度と増加傾向にあります。(22年度 217件 ⇒ 23年度 230件 ⇒ 24年度 263件)

相互利用は依頼が増加

電子ジャーナルや機関リポジトリ等からインターネット上で見ることができる論文が増えてきているにもかかわらず、論文の取寄せ件数は増加しています。(論文取寄せ 1,677件 ⇒ 1,759件)

雑誌記事の取寄せや、国会図書館にしか所蔵のない文献の取寄せが増えたためと考えられます。(国会から取寄せ 84件 ⇒ 151件)

また、図書の取寄せも増加しています。(116冊 ⇒ 157冊) 24年度の特徴として、学部生の取寄せが例年に比べ多かったことが挙げられます。

図書館オリエンテーションを実施しました

図書館主催の4月のオリエンテーションには延37人の方が参加されました。今年は研究室単位で4回生のグループ参加もあり、急きょその場で論文検索、電子ジャーナル、論文コピーの取寄せ方等に変更して実施という場面もありました。

また、例年通り環境・情報科学概論の時間をいただき、環境・情報科学科1回生には教室での説明と附属図書館閲覧室での実習を行いました。

新たな依頼も今年は2件ありました。①環境デザイン学科1回生情報処理基礎演習の時間には、情報処理室と附属図書館閲覧室での実習を、②転入・新任職員向けにも簡単な図書館ガイダンスを実施しました。

オリエンテーションで使用した「図書館利用ガイド」は図書館2階カウンターに常備していますのでご活用ください。



学術認証フェデレーション GakuNin

学術認証フェデレーションとは、学術 e-リソースを利用する大学、学術 e-リソースを提供する機関・出版者等から構成された連合体のことで、各機関はフェデレーションが定めた規程（ポリシー）を信頼しあうことで、相互に認証連携を実現することが可能となりました。学内はもちろん、自宅、他大学、海外からでも府大の学生・教員であることを認証して様々なサービスを利用することができます。

本学でも今年の 1 月からスタートしています。学術認証フェデレーションへのログイン方法等は学内専用サイトをご覧ください。

図書館における学認活用の大きなメリット

電子ジャーナル DB	現 状	学認を利用
CiNii の「定額アクセス可能」本文の利用	①学内 LAN 接続 PC から利用 ②学外から利用する場合はサイトライセンス個人 ID を別途取得	キャンパス Web システム、情報処理室ログイン等に使用している全学認証 ID と Password で左記の電子ジャーナル DB が学外からも利用できる。
SpringerLink の利用	①学内 LAN 接続 PC から利用 ②学内 LAN 接続 PC から SpringerLink の HP に入り登録が必要。登録後は E-mail address と Password で学外からログイン可能	
EBSCOhost の利用	①学内 LAN 接続 PC から利用 ②図書館カウンターで ID、Password を申請後学外からログイン可能	

EBSCOhost のプラットフォームから、CrossRef の設定により本学全契約電子ジャーナルの論文検索が可能になりました。（データベースの「The Times Digital Archive」は除く）

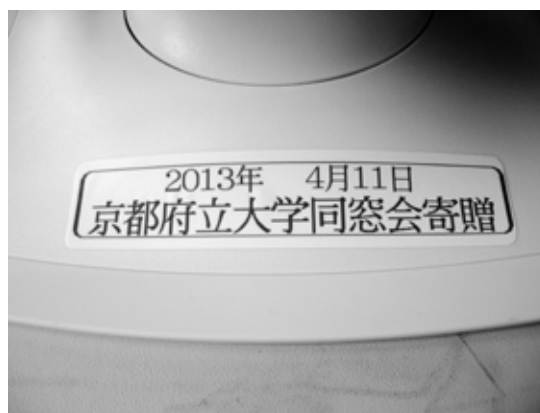


利用者用パソコンを 7 台 更新しました!

閲覧室の利用者パソコンは、京都府立大学同窓会と京都府立大学後援会からご寄贈いただき、皆さんに利用してもらっています。

最近、経年により不具合が生じているパソコンが多数あり、京都府立大学同窓会（会長 北川 壽一様）から「後輩の教育・研究に必要であるなら」とご寄付いただけることとなり、7台更新することができました。

パソコンの設置は4月に完了しています。これで、インターネット用6台、検索性4台の全てを快適に使用できると思います。貴重な備品です。譲り合って大切にご活用ください。



カレンダー

開館時間

9:00~ 21:00	9:00~ 17:00	休館 土日祝
----------------	----------------	-----------

☆閉館時の図書の返却は、図書館西側(喫煙コーナー付近)の返却ポストをご利用ください。

2013年7月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

2013年8月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2013年9月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

★7/20(土)・21(日) 10:00~16:00
オープンキャンパス図書館閲覧室開放。
在学生の利用も可。

★7/29(月)~ 夏休み長期貸出
返却予定日 10月7日

★8/12(月)~28(水)
蔵書点検のため、2階閲覧室(書庫を含む)
閉室。学内者は3階各室利用可能。
(9:00~17:00)

★8/29(木)~9/27(金) 開館時間変更
9:00~17:00

★9/24(火)~ 通常貸出

★9/30(月)~ 通常開館(9:00~21:00)